

川高は地域に生き続ける

大湊高等学校川内校舎

令和3年3月、県立大湊高等学校川内校舎は卒業生約3000人を輩出した73年の歴史を閉じます。

昭和23年大湊町立大湊高等学校定時制の課程川内分校が開校され、県に移管された後昭和51年新たに全日制課程が設置となり、昭和53年にはいよいよ西通り地区住民悲願の独立校昇格が叶い、県立川内高等学校となりました。令和2年10月10日の閉校記念式典において下川原校長が式辞で、「独立校昇格記念誌」における初代校長八戸誠一氏の掲載文を紹介しました。

「本校もようやく産声をあげることができたものの、現在はまことに粗末なプレハブの校舎で毎日不便をかけながら教育活動を進めねばならず、生徒や先生方には本当に気の毒というほかない。しかし、教育にとって建物ばかりが唯一の必要条件ではなく、教師、生徒の魂の触れ合いこそ、その原点の一つと考えている。」また、平成10年からPTA会長、後援会代表理事と23年間にわたり本校に携わってきた閉校記念事業実行委員会委員長瀬川氏からは、「地域にとつていとしい高校が無くなってしまふのは大きな痛手である。高校の歩んできた歴史が引き継がれていくことが同窓生の願いである。」と御挨拶いただきました。

さて本校は地域社会に信頼される存在となるために様々な活動を行ってきました。部活動では、全国大会出場を果たした硬式庭球部や秋季青森県高校野球選手権でベスト4進出を果たした硬式野球部が活躍しました。64年前からお盆に町内対抗野球大会を行っているこの地区に大きな感動をもたらしました。行事では約40年前から行われてきた生徒の手作り扇ねぶたと流し踊りが地域の風物詩として町を盛り上げました。川内溪谷まで約20km歩く「川高ウォーキング」は今年21年目で最後となりました。今年まで継続されてきた勤労体験学習のルートは、昭和59年に学校林を造成し、当時の文部省から勤労体験学習研究指定校に選ばれた頃がありました。今年度は、花壇の整備や夏野菜の栽培に挑戦しました。また、キャリア学習の一環として行った「かわっちキャリアチャレンジ」、「グローバルマインドプロジェクト」「西通りを楽しくする」では、地域企業との共同作業等を通じて地域に根ざしたビジネスモデルを生徒が考え実現しました。その精神は「まさかり高校SMILEプロジェクト」や「しもきたマルシェ」の活動に参加した生徒へと引き継がれました。

全ての「最後の行事」においても、生徒11人と教職員15人が全力で力を合わせ取り組みました。それを支えてくださったのが、保護者の方々、後援会、同窓会を始めとする地域の方々でした。体育祭ではPTA・同窓会・後援会連合チームが本気で生徒と対戦してくださいました。最後の生徒会長も、「3年間、仲間や地域の皆さんに支えられ、成長できました。川内校舎で学んだことを誇りに、全力で最後の高校生活を過ごしていきたい。」と閉校記念式典で感謝の言葉を述べました。

少子化の波には逆らえず分校、校舎を経て閉校となりますが、地域の皆様の心の中に生き続ける川高であってほしいと願っています。閉校後の令和3年8月、例年通りに同窓会総会で新入会員を歓迎することになっております。最後の同窓生を地域の方々が暖かく迎えてくださることに感謝申し上げます。

(教頭 加藤 聖子)